愛のトラックは走る
三台に満載して水害地へ

西九州を襲つた豪雨は瞬時のうちに長崎、佐賀、熊本の三県に甚大な被害を与えた。とくに諫早、熊本の松尾町は悲惨をきわめ、肉親を奪われ、永年住み馴れたわが家が跡かたもなく水で流されまた土砂で埋もれたところが枚挙にいとまがないほどだ。被害者を救への運動はたちまち全国に拡がつたが、三鉱労組、主婦会でもいち早く立ち上り十円カンパ。これにつぐ衣類カンパと温い手が差しのべられ、集つた衣類はトラック三台に一杯になつた。十二日諫早へ二台、熊本へ一台救援トラックは愛の荷物を積んで炎天下にひた走りに走つた。

悪臭放つ被災地

十一日に本部へは各地域で集められた衣類の梱包がトラックに山積されて続々集つた。トラックに乗つて荷物を集約する教宣部、主婦たち、はては本部で集つた梱包の整理をする主婦たちは汗を拭う暇もない忙しさだ。翌十二日、会社のトラック三台に荷物はギツシリと満載された。トラックの側面には水害救援物資と大書した横幕がはられ、組合、主婦会旗がトラック上にはためいている。

組合役員、主婦会、書記の人たちに見送られて諫早へ二台、熊本へ一台、主婦も交えた七名の同乗者は元気に出発した。

なお、諫早へ赴いた松本教宣部員は長崎県評が諫早へ設けた救護対策本部へ物資を届けた後、被害地をみてまわつたが、このときの状況をつぎの如くつたえている。

川の中に家跡が

トラックが大村市の郊外に出てからは川幅が物凄く、畠か川か判らないほどひどい。これが延々と諫早まで続いている。その間に電柱が転々と引掛つているところや、堤防が洗われて家が半分倒れかかつているのも見られた。

午後三時に対策本部につき、荷物を下し町をみて廻つたが、大通りをまわるのが精一杯で、横道にでも行けば長靴をはかねば歩けなく、町全体がいやな臭気におおわれている。失意のドン底にいた町の人たちもやつと元気をとり戻し、雄々しく建設にとりかかつているのをみて心強かつた。堤防がいまどんどんとつくられているが、明らかに川の中に家のあとがみられる。川幅は大分広くなつていた。いま市内に収容所が六つあり、各所に約六百名ぐらいが収容されていたが、現在その半数ぐらいに減り家へ帰つたり、建設したりしているが、復旧しても約百名ぐらいはどこに行く当てもなく残るものと見られている。と生々しい現地のもようと語つていた。

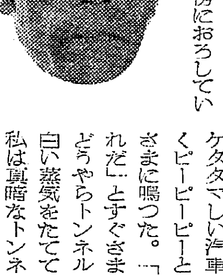
（上）いよいよ災害地へ出発　本部前に集結したカンパ隊　（下）被災地で荷却しして対策本部へ

夏の夜の夢

大雨のせいか今年の夏はしのぎよかつたようだが、残暑まだきびしいものがありますこの暑気ヌキにすゞしい夢を求めました。

重箱婆

岩本宗二郎



楠の老樹が覆いかぶさつた熊本城内の夜道は自分の足音さえ気味が悪い。暮安坂（一部には法華坂ともいう）を通りかかつた二人の若い衆があつた。「この辺には昔重箱婆が出たそうな……」と話しかけた途端ヒウツと吹きつける風の中から「今でもおるぞうヒツヒツヒ」と真つ四角な重箱婆の顔が現れたから堪らない。息も絶え絶え駆け出した。道傍におろしている甘酒屋にやつと飛び込んで実はこうだつたと話をすると「そいつはこんな顔だつたろう」という甘酒屋の老爺の顔がたちまち変る重箱婆、二人は遂々気を失つてしまつた。

—これは幼い日の縁台で聴いた夜話である—　（短歌選者）

「水を」「水を」

木本　安喜

ケタタマしい汽車の汽笛が気味悪くピーピーピーと三回づつ、続けさまに鳴つた。「アツ、汽車しかれだ」とすぐさまかけだした。どうやらトンネルの中だ。汽車は白い蒸気をたてて停車している。私は真暗なトンネルへ懐中電灯を頼りに走り込んだ。十四、五歩も走つたかと思うと何かにつまづいてバツタリ倒れた。起きあがろうと前方を見ると、なげ出された懐中電灯のかすかな光りに両足切断された女の人が髪をふり乱して、うめき声をたてて私の顔をジーツと見て「水を!」「水を!」と足のない身体を手でささえてにじり寄つてくる。私は声が出ない。彼女は青白い顔で「水を!」「水を!」とだんだん私のところによつてくる。進退ここにきわまる。

これは友人から聞いた夏の夜話しである。（港務支部　議長）

職場が対決の場
電氣分会(三川)で方針討議

三川支部電気分会（坑内）ではこのほど分会活動方針案をつくつたが、さる七月三十一日午後四時四十分から七時三十分まで総会を開いて活動方針の質疑応答を活発に行つた。

ここ電気分会は三交替、常一番併せて二二二名が在籍、総会するにも繰込時間が違うため一番方は約二時間あまり、同じ常一番でも早い人は一時間も待たねばならぬという特殊なところだが、この日二番方を除き多数出席して総会を行つた。

麻生議長を選んで経過報告の後、電気分会としての過去の反省が率直に広瀬分会長から行われた。この反省の上にたつて今年の方針はどうするかと、この方針案が説明されたが、「三カ月に一回昇坑後分会員総会を行つて意志の疎通を図る」「月一回は班会議を行つて労働条件などの討議を行い職制との闘いを展開する」などやこの他学習活動、文化活動など六項目が謳われている。

以上の点について活発な論議が行われ、本当の意味での分会組織づくりに邁進することが誓われた。

広瀬分会長談

何といつても職制との対決の場は現場だ。そのためには己の力を過信することではなく分会の組織づくりが必要である。電気分会としてももう一回じつくり振返つて反省し、敵のPRやマスコミを打破り意志の統一をやりながら五、三〇〇万トンに対決して行きたい。

と語つている。

これにより、電気分会は新しい情勢に対処するため、分会員の一致結束を早くも整えようとしている。

船積分会に成果
廿五項目を掲げ徹夜交渉

汽車、電車庫分会の職場闘争で大きな成果をおさめ、注目された港務所の職場で、こんどは船積分会が苦情として取上げた増員、営繕問題をふくむ二十数項目を掲げて数回の交渉の末、ついに徹宵交渉まで持込みほとんど諒解点に達したという問題が出ている。

各分會も激励デモ

船積分会（固定給三十名、請負給四十名）では、現場の苦情として十八番線増員の件、水道の件、カーテン、日覆、茶沸しの件、トンネル便所打壊しの件など二十五項目にのぼる要求を集約した。

この要求を掲げて去る十二日までに職場委員は現場係長と二、三回にわたつて交渉を行つたが、ラチがあかなかつた。

とりわけこの職場は直傭で切替になつた人たちが主体になつている分会であり、特殊な現場だつたともいえる。この人たちの苦情が中心になつているのだが、普通の現場では常識的に解決している項目が、ここでは旧態依然として存在しており、いかにデタラメであつたかをハツキリ裏付けるばかりだつた。

他の分会からみればおかしいほどのものであつた。にもかかわらず交渉には課長まできて頑強に反対してきたものである。

あまりのことに不満を爆発させた分会員はついに十二日課長を呼んで再び交渉を再会、ついに交渉は徹宵におよんでいつた。

現場では二番方交替のとき各分会は交渉をデモで激励する盛上りを示している。

頑強に反対していた会社もとうとう粘り強い交渉に一歩譲り、各項目はほとんどが要求通り諒解をみるにいたつた。

例えば一名増員の十八番線の件をみると

いままでは四名でやつていたがコークスが炭車の底からなかなか出難いので、棒でつつくなど困難をきわめていたもの。この問題は以前から懸案になつていたが、ようやくこれで解決されたものである。

ともかく船積分会としてははじめての闘争であり、大きな意義をもたらしたが、さいきん港務所の各職場で起つてきた職場闘争が教訓となつて分会員の気持が盛上つたものである。

× ×

愉快に西瓜割り
伸び行く野添児童部

各地に水害をまき起した長い雨もカラツト晴れた八月八日、野添分会中学生徒会は、野添分会長（山隈氏）引率で、バス二台を駆つて船小屋見学を行つた。

生徒はスケツチ大会、水泳、ボートとまた西瓜割には多勢の見物人の応援まで飛び出し、他団体からも数名参加するなど愉快な催しもあつた。

父兄はゆつくり温泉にと一日を楽しくすごした。

野添生徒会は生徒の自主的話し合いの中から、夏休み中朝のラジオ体操を実施し、指揮者も生徒でレコードプレイヤーも地域分会より借用して生徒の手で元気いつぱいやつている。

また体育会、レコードコンサート、ハイキング、工場見学と多彩な行事が実施されている。

その中でも生徒新聞「のぞみ」は今月で三号の発刊を重ね、編集から原紙切り、プリント、配付と全部生徒の手で発行されている。

文はまずくともますます発展するよう野添分会役員はじめ父兄は温い目で見守つている。（野添発）

オツト危い!! 西瓜は大丈夫

海水浴場へと進出
好評の三川コールマイン

＝海辺で楽しい音楽の夕べ＝

三川支部の楽団サークル〃コールマイン〃はさいきん引つ張りだこで尻の暖くなる日もない有様だがこんどは荒尾海水浴場へ進出、同支部の農村地帯有明、中央校区分会の分会員や附近の農村の人たちに呼びかけて海水浴場へきて貰い「農村に贈る夕べ」を開催した。海水浴場にときならぬ音楽のメロデイをひびかせ、海水浴客はこのため大喜びだつた。

さる二十七日、荒尾の海水浴場海の家で午後六時すぎから開始。一部二部にわけて二十六曲目を合奏したが、ご自慢の歌手も歌いまくり、各曲ごとに拍手の連続、なかには外部からの飛入もあつて大いに賑つた。ラストは「炭掘る仲間」の新組合歌を演奏、午後八時四十分、あたりはもう夜のとばりが降り暗くなつているのに、黒山の人だかりのうちに、みんなから喜ばれて盛会裏に終了した。

遊園地完成へ
緑友会の若人応援

緑ガ丘捻分会ではいま分会員の汗の奉仕で、同分会の遊園地が着々とつくられている。

この遊園地は分会での四年ごしの懸案事項だつたのが、こんど会社との交渉でOKになつたもので、早速工事が始められているのである。

第一期工事は八分通り完成、残る第二期工事で完成させ、よい子たちの待ちわびる遊園地がいよいよでき上るのである。

いま炎天の下で一日も早く工事を終ろうと分会員も主婦も子供も一緒になつてセツセと建設に急がしい。すでに荒尾海岸から海砂も運び終つている。

とくにこの工事に、緑ガ丘青年でつくる緑友会の人たちが協力しているのに地域の人たちは深い感謝をささげている。

緑友会では愛される青年団になるモツトーを掲げて奉仕にいそしんでいるが、去る五日には海砂を撤く作業に応援、猫の手も借りたい分会の人たちは大助りだ。

また、去る十五、十六日に行われた地域の盆踊りにもヤグラの建設はいうにおよばず、舞踊、寸劇、万才、仮装にも出演して応援するなどのありさまで、このほかにも八月中に予定されている子供会の赤田ガ池キヤンプに、役員の手が足りないだろうと手助けに行くことが申入れられている。

一日一日と作業は完成されているが、こういう暖い協力のもとでいま工事は急ピツチに目にみえてすすんでいる。

悩みは二番方
三川の学習拡まる

三川支部の事務所の入口に小さなノボリが下げられると、この日は学習日である。

さいきんの支部学習状態を探つてみると、ここでは毎週月曜日に組合事務所二階で午後四時半ごろから約二時間半、講師を招いて行つている。

ここ数回の学習テーマには天野先生の「現下の経済状態」、奥田先生の「労働組合と経済学」「自民党の新労働政策の基本理念」などがテーマとして取組まれている。

講座に出席する人は現在三十名前後だが、みんななかなか熱心であり、この暑い夏中でも、さして出席に変動がないことからも、これが伺えた。

いま、一番みんなが望んでいるのは二番方のとき出席されないことである。このため、なかには講座の日だけ特別に方替りさせてくれという希望者もあつているほどの熱心さ。

また講座内容についてもいろいろと注文が出されており、例えばさきに訪中使節団として一行に加わつた日中友好協会の原田三友氏を招んでくれというのも出てきておる。

講座についても回を重ねるごとに目が高くなりある講師など何も用意せずにおざなりなテーマで講義したときなど、あまりなおざりだと非難の声が聞かれたほどである。

なお支部では、この学習は地域へ落すともつと成果もあるとして、それを計画しているが、さしあたり二カ月に一回全地域で行い、その間の一カ月を執行部と政治局がタイアツプして全地域で講座を受持とうとしている。

いま、地域で学習活動を本格的にやつているのは新港地域分会で、毎月第二と第四日曜の二回、自分たちでテキストを作り行つている。